

【研究ノート】

植民地期・在日朝鮮人紡績女工の労働と生活

—大阪在住の済州島出身者を中心に—

藤 永 壯

本稿は、韓国・済州発展研究院の編集・発行による『済州女性史Ⅱ—日帝強占期—』（2011年6月、朝鮮語）に、筆者が執筆した「재일 방직 여공의 노동과 생활—오사카 [大阪] 지역을 중심으로—（在日紡績女工の労働と生活—大阪地域を中心に—）」の日本語版原稿に若干、手を加えたものである。

大阪は日本で最も在日韓国・朝鮮人が集中している地域であり、しかもその多くを済州島出身者が占めている。日本の朝鮮植民地支配のもと、済州島民は生活の糧を求めて、当時日本最大の工業地帯であった大阪を訪れ、やがて定着していった。済州島出身の男性は、ゴム、ガラス、メッキなどの化学工業のほか、金属・機械工業などの零細工場の労働者や、土木労働者として働き、一方で女性は紡績業をはじめとする繊維工業に従事する者が多かった。大阪の済州島出身者はこのように、言わば底辺労働者として日本資本主義の成長を支える存在となったのである。また彼ら／彼女らの多くは、苛酷で差別的な労働条件の改善、そして窮極的には民族の解放を求めて労働運動などに身を投じ、大阪の社会運動を牽引する一翼をも担っていった。

本稿は在日朝鮮人女性の代表的な職種であった紡績工に焦点を当て、在阪済州島出身女性労働者の労働と生活の実態に迫ろうとしたものである。すでに韓国で発表した原稿であるにもかかわらず、編集委員の方々のご厚意で本誌への掲載がなかったことに感謝申し上げる。また、転載を快諾し、写真の一部をご提供下さった済州発展研究院関係者の方々、新聞資料についてご教示下さった塚崎昌之氏にも、この場を借りて謝意を表したい。

は じ め に

本稿の目的は、植民地期に日本へ渡航し、工場労働者となった済州島出身女性の労働と生活の状況について述べることである。ただしその全体像を把握するのは困難であるので、ここではさしあたり女子工場労働者の代表的な職種であった紡績女工を中心に叙述するこ

とにしたい。

植民地期の在日朝鮮人紡績女工に関しては、すでに30年ほど前に、金賛汀と方鮮姫がすぐれたルポルタージュを発表している¹⁾。二人の著作は、研究論文のスタイルはとっていないものの、文献資料を博搜し、何よりも体験者の証言を数多く掲載している点で貴重な成果であり、まず参照されるべき文献である。そしてそこには大阪地域で紡績女工となった5名の済州島出身者の証言も収録されている²⁾。

ただ「済州島出身の紡績女工」だけに焦点をしばって、その特徴を抽出することは、資料上の制約からきわめて難しい。そこで本稿では済州島出身者がとくに集中していた大阪地域全般の状況をも合わせ見ることによって、資料不足を補うべく努めたい。

なお植民地期の大阪在住朝鮮人の労働・生活実態については多数の先行研究があり、ここでそのすべてを取り上げることはとうていできない。これらは、近年の代表的な研究成果である杉原達の著書³⁾で詳細に紹介されているので、関心のある方は同書を参照するようお願いしたい。

I 概 観

大阪地域の済州島出身紡績女工の実態を把握できる資料が残っているのは、せいぜい1910年代後半から30年代半ばぐらいまでである。植民地期の中でも、時期によってさまざまな変化が起きているはずだが、こうした時期別変化を明らかにできるような資料状況にない。そこでタイムスパンを少し長めにとり、1920年代から30年代前半ぐらいまでの、大阪地域の済州島出身紡績女工の全般的な状況について、統計値をもとに素描しておきたい。

よく知られているように、大阪府は1922年以来、今日に至るまで、日本の都道府県中、最も在日朝鮮人の人口が多い地域である。1922年12月末の大阪府の朝鮮人数は13,337

表1 朝鮮人女工の主要就業先(1924年3月末現在)

警察署別	事業所名	事業所同居者	通勤者	合計	男子職工数	男女合計
中津 堺	大阪毛織会社	25	0	25	28	53
	大阪織物会社	15	13	28	7	35
	岸和田紡績堺分工場	96	0	96	2	98
芦原	日本紡績摂津工場	106	30	136	49	185
岸和田	岸和田紡績本社工場	181	18	199	11	210
	岸和田紡績野村分工場	197	15	212	8	220
	岸和田紡績春木分工場	80	39	219	40	250
十三橋	小津起業会社	170	0	170	2	172
	大阪莫大小会社	23	3	26	6	32

出典:朝鮮総督府「阪神・京浜地方の朝鮮人労働者」朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第1巻、三一書房、1975年、pp.405-406。

備考:斜体は計算が合わないが原資料のまま。

名で在日朝鮮人総数（59,744名）の22.3%を占めていた。大阪府の朝鮮人女性は2,322名なので、大阪府に在住する朝鮮人の17.4%が女性であったことになる⁴⁾。

その1年余り後の1924年3月末の時点で、大阪府の朝鮮人女子労働者の代表的な就業先をまとめたものが表1である。業種としては、すべてが繊維工業であり、とりわけ紡績業が圧倒的多数を占めていたが、なかでも戦前、泉州地方最大の紡績資本であった岸和田紡績⁵⁾の4工場（本社工場および堺・野村・春木分工場）が積極的に朝鮮人女工を採用していた様子を知ることができる。このことは表2に示した1928年6月末の

表2 大阪府在住朝鮮人分布状況(1928年6月末)

	男	女	計
大阪市	28,375	6,642	35,017
うち東成区	8,053	1,921	9,974
堺市	895	755	1,650
岸和田市	225	1,253	1,478
泉南郡	473	1,523	1,996
その他	3,807	1,185	4,992
合計	33,775	11,358	45,133

出典：大阪市社会部調査課「本市に於ける朝鮮人の生活概況（一九二九年）」朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第2巻、三一書房、1975年、p.1031。

大阪府の朝鮮人分布状況において、堺市・岸和田市・泉南郡⁶⁾など紡績工場の集中地域に朝鮮人女性の比率が高かったことから裏付けられるであろう。

表3 繊維工業朝鮮人女工年齢分布(大阪市、1930年10月)

	繊維工業朝鮮人女工		朝鮮人女工全体		繊維工業朝鮮人男工	
15歳以下	13	4.2%	30	4.7%	4	0.4%
16-20歳	153	50.0%	300	47.4%	257	26.0%
20-25歳	87	28.4%	162	25.6%	260	26.3%
26-30歳	17	5.6%	50	7.9%	190	19.3%
31-35歳	17	5.6%	46	7.3%	162	16.4%
36-40歳	5	1.6%	20	3.2%	69	7.0%
41-45歳	7	2.3%	15	2.4%	31	3.1%
46-50歳	5	1.6%	7	1.1%	9	0.9%
51-55歳	1	0.3%	2	0.3%	4	0.4%
55-60歳	1	0.3%	1	0.2%	1	0.1%
合計	306		633		987	

出典：大阪市社会部調査課「本市に於ける朝鮮人工場労働者（一九三一年）」朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第2巻、三一書房、1975年、p.1208。

また繊維工業に従事する朝鮮人女子労働者の特徴として、低年齢層の多かったことが指摘できる。表3に示した1930年10月の大阪市の調査では、20歳以下が全体の54.2%、25歳以下とすると全体の82.6%を占めることになり、それぞれ26.4%、52.7%であった男子労働者よりも、女子労働者は若年層に集中していることが分かる。図1の写真は1922年5月31日、大阪市民館で朝鮮人の「労働婦人を善導救済する目的で」開催された「在阪朝鮮職業婦人生活改善大会」の様であり、摂津紡績、福島紡績などの企業で働く「愛らしい少女を中心に」約

図1 在阪朝鮮職業女性生活改善大会



出典：『大阪毎日新聞』1922年6月1日。

100名が出席したというが、この当時の朝鮮人女子労働者のあまりの幼さに驚かざるを得ない⁷⁾。

紡績業をはじめとする繊維工業は日本資本主義の黎明・発展期において、手先が器用

で従順な若年の女子労働者が多数雇用された業種であったが、在日の朝鮮人女子労働者についても、全く同様の傾向が認められるのである。

なお賃金水準は、資料によりかなり違いがあるが、表4に示した1923年末の大阪市での調査では、朝鮮人紡績工の日当は「普通」で1.20円となっており、朝鮮人労働者全体の1.54円の8割弱、日本人紡績工の1.70円の7割程度であった。また同じく大阪市で

表4 紡績工の日当(大阪市、1923年末)

単位:円

	朝鮮人			日本人		
	最高	最低	普通	最高	最低	普通
紡績工	2.00	0.90	1.20	2.80	1.00	1.70
全体平均	1.85	1.17	1.54	2.65	1.54	2.02

出典:三木今二『内地に於ける朝鮮人とその犯罪に就て(司法研究第17輯報告書集2)』司法省調査課、1933年、p.45。

表5 繊維工業労働者の日当(大阪市、1930年10月)

単位:銭

	朝鮮人			日本人		
	総平均	男平均	女平均	総平均	男平均	女平均
繊維工業	122	134	82	107.8	162.7	92.9
全体	122	139	81	204.7	264.7	98.1

出典:大阪市社会部調査課「本市に於ける朝鮮人工場労働者(一九三一年)」朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第2巻、三一書房、1975年、p.1222。

原注:「内地人工場労働者の一日平均賃金は内閣統計局調査工場労働者の「昭和四年一日平均賃銀諸手当賞与」調の中労調に最も関係の深い同年十月分を掲示せるものである。

は、朝鮮人女子労働者全体の中では平均的だが、同じ繊維工業の朝鮮人男子労働者や日本人労働者に比べれば、低額であったことは間違いないだろう。そして後述するように、1920年代を通じて、賃金はおそらく低迷状態にあった。

さて日本在住の済州島出身者数については、1923年から38年にかけての変遷を外村大がまとめている(表6、統計値は12月末現在)。1923年の時点で、すでに1万名を超える済州島出身者が日本に滞在していたが、1927年には3万名を突破するまでに急増した。この期間の急増は、広く知られるように1923年2月より尼崎汽船部が済州・大阪間に「君が代丸」の定期運航を開始し、翌1924年には朝鮮郵船も定期運航をはじめたことによると見て、まず間違いないだろう。その後も、世界恐慌翌年の1930年に減少した以外、在日済州島出身者数は増え続け、1934年に50,045名となってピークを迎えた。この年の済州島人口は日本人を含めて189,932名であるので⁸⁾、済州島人口の実に26.3%に相当する人員が日本に在住していたことになる。

同じ1934年の7月末の統計では、在日済州島出身者数は49,088名(男28,824、女

20,264) となっており、道府県別の第1位は大阪府で36,871名(日本全体の75.1%)であった。大阪府の圧倒的な多さが際立っているが、これに次ぐのも京都府2,208名(4.5%)、兵庫県2,062名(4.2%)、和歌山県1,583名(3.2%)と、大阪府に隣接する近畿地方の府県であり、この4府県だけで全体の87.0%に達していた⁹⁾。一方、同年末の大阪府在住朝鮮人人口は171,160名なので¹⁰⁾、済州島出身者はその3割程度を占めていたことになる。

在日済州島出身女性の職業(1934年4月末現在)としては、紡績工が5,375名と圧倒的に多く、これにゴム工1,756名、ミシン裁縫工1,183名、ガラス工1,050名、マッチ工945名と続いている。とくに紡績工は女子の割合が高く、男子(1,258名)の4.3倍に上っており、また在日済州島出身女性(20,699名)の26.0%を占めていた¹¹⁾。なお在日済州島出身者数はこの1934年を頂点とし、以後は減少していく(表6)。済州島出身の紡績女工も、1938年末には1,978名にまで減ったとする統計値もある¹²⁾。

以上より、紡績工は済州島から日本に渡航してきた女性の最も代表的な職業であり、とくに大阪府南部の堺市・岸和田市・泉南郡などに集中していたという構図が浮かび上がってくる。しかしそれは低年齢の女性に、低賃金労働を強いるものであり、彼女たちが過酷な労働条件の下におかれていたことは想像するに難くない。

そこで次に、文献資料やインタビューの記録などから、紡績女工を中心とする済州島出身女子労働者の労働と生活の実態をさぐっていくことにしたい。

II 渡航のはじまり

紡績工として働くことを目的に、朝鮮人女性が日本への渡航をはじめるのは、韓国「併合」から間もない1910年代前半のことである。1913年12月のある新聞記事は、大阪の紡績会社では日本人だけでは女工が不足するため、最近では朝鮮人女工を使用するようになっており、皮切りとなった摂津紡績の54名、三重紡績の40名のほか「五六人位宛は彼方此方にも見るやう」になったと伝えている。朝鮮人女工は日本人女工に比べ「柔順で勤勉で」あり、摂津紡績野田分工場の場合は、募集人が慶尚南道晋州に赴き、3年の年期で

表6 在日済州島出身数の推移

年	人数
1923	10,381
1924	19,552
1925	25,782
1926	28,144
1927	30,505
1928	32,564
1929	35,322
1930	31,786
1931	33,023
1932	36,125
1933	47,271
1934	50,045
1935	48,386
1936	46,463
1937	45,943
1938	45,950

出典:外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究—形成・構造・変容—』緑蔭書房、2004年、p.43。

備考:(1)原資料は、榊田一二「済州島民の内地出稼ぎに就いて」『大塚地理学会論文集』第5輯、1935年、済州島庁『済州島勢要覧』各年版、杉原達『越境する民』新幹社、1999年、p.84。

(2)『済州島勢要覧』の1926年以降の統計は、渡航者数と帰還者数の差を、前年の在留者から減じるとの方針で算出されており、自然増加を含んでいない。したがって、在留者はこれより多数であると見なければならぬ(外村、前掲書、p.43)。

図2 摂津紡績野田工場で働きはじめた
朝鮮人女工の作業服姿

紡績の朝鮮女工

向つて右より金南珠（十九歳）李化年（十五歳）



出典：『大阪朝日新聞』1913年12月26日。

14～27歳の女性19名を連れてきたという（図2はこの時、紡績工場で働き始めた朝鮮人女工の作業着姿である）¹³⁾。朝鮮人女工の働きぶりは概して好評であり¹⁴⁾、晋州のほか、同じ慶尚南道の馬山など、ほとんどは朝鮮南部地方から来ていたようであるが¹⁵⁾、朝鮮北部地方への募集の動きも報道されるなど¹⁶⁾、需要の増加にともない、漸次募集地域も拡大していったものと見られる。しかし一方で、早くも1914年7月には、慶尚南道密陽郡出身の12～29歳の女性14名が、摂津紡績野田工場に雇われたものの、「会社は約束通り待遇せざるより」一行は警察署に出頭し「会社の無情を訴へた」という事件も起こっている¹⁷⁾。

さて先述のように、とくに朝鮮人女工の多かった岸和田紡績では、1918年から朝鮮人女工の雇用を開始した模様である。その理由は第1次大戦による好況で女工が不足したためであり、同社では1918年3月に事務員を朝鮮に出張させ、まず50名の朝鮮人女工を雇用した。

この女工たちが「比較的成績良好」であったので、同年7月にはさらに100名の朝鮮人女性を募集し、これを4工場に分散させて就業させた。「爾来此等女工の縁故を辿り自発的に紡績女工志願を以て渡航する朝鮮女続出」する状況になったという¹⁸⁾。こうして1921年3月には、大阪府下に約2,500名の朝鮮人工場労働者がおり、うち500名が女工であると伝えられる状況になっていた¹⁹⁾。

この1918年の岸和田紡績の募集が、朝鮮のどの地域で実施されたのかは確認できないが、済州島民が大阪へ渡航し工場労働者に雇用されたのも、やはり第1次大戦の好況を原因として1910年代後半に始まったようである。

「欧州大戦勃発とともに我が国未曾有の工業界の躍進的発達をみ、内地労働者や職工の著しい不足を告げ、ついに労働力を絶海の孤島済州に求めるに至った。すなわち大阪紡績工場その他の会社事務員が職工募集のため来島し、これに応募して大阪に渡航した島人は優良職工として認められて需要度が増加した。好況期はさらに続き、内地工業界の隆盛とともに大正8年 [1919年—引用者]、阪神工業地帯からの募集と出稼ぎ帰還者の物質生活の向上と内地紹介に刺激され、多数の渡航者をみた……」²⁰⁾。

こうして遅くとも1919年以前には、済州島で大阪の紡績会社による工場労働者の募集が開始され、需要の増大などにもない、渡航者は増加していったのであった。

1922年7月ごろ、大阪では「慶尚道、全羅道の者で殊は済州島出身の者が最も多い」「よく鮮人同志の喧嘩があるが喧嘩するのも済州島人に多いさうだが同時に経済的に成功するのも亦彼等」であったという²¹⁾。すでに1920年代初頭には、大阪では済州島出身者が最も多く、また「経済的に成功」していると報道されているのである。1922年の済州島から日本への渡航者数は3,502名で、その内訳は男性が3,198名、女性が305名であった²²⁾。さらにやはり1922年11月の新聞報道から、このころ岸和田紡績春木分工場に済州島出身女工5名が勤務していたことを確認できる（年齢は30歳、46歳、45歳が各1名、39歳が2名と比較的高い）²³⁾。またやや後の時期と思われるが、岸和田紡績では「慶尚道と済州島出身の女工さんが半々ぐらい」との証言もある²⁴⁾。岸和田紡績がいつから済州島出身の女工を雇用しはじめたのかは分からないが、遅くとも1920年代初頭には開始し、しかもその採用に積極的であったと言えそうである。

このように第1次大戦の好況による労働力不足から、1920年前後の時期に、大阪の紡績会社は女工としての雇用を目的に済州島での女子募集を開始し、その数は順調に増えていったものと見られる。そして注目されるのは、先述のように大阪・済州島間に定期航路が開設された1923年2月以前から、すでに多数の済州島出身者が大阪で働いていたと推測される点である。大阪・済州島間の定期航路開設が、多数の済州島民を大阪へ渡航させた要因となったことは疑いないが、そもそも1920年代初頭に大阪で就業する済州島出身者が急増していたことが、逆に定期航路設置の動機になったと言えるのではなかろうか。

繰り返し述べてきたように、定期航路開設によって大阪で工場労働者として働く済州島女性がいっそう増加したことは間違いない。定期航路開設前の1921年3月には大阪府に約2,500名の朝鮮人工場労働者がおり、そのうち500名が女工であると報道されている²⁵⁾。ところが前掲の表1によれば、定期航路開設から1年後の1924年3月末の時点で、大阪府下の朝鮮人女工は1,000名を優に超えていた。それがさらに1年後の1925年2月の報道では、堺・泉南地域だけで1,500人を数えており、

図3 寺田紡績の春の遠足の模様（1933年）



出典：『済州女性史資料叢書1 写真資料集』
（済州道・済州道女性特別委員会、2001年）

その内訳は、岸和田紡績の本社工場が300名、野村分工場270名、春木分工場500名、堺分工場128名、そして寺田紡績が200名ということであった²⁶⁾。もちろん朝鮮人女工全員が、済州島出身者というわけではないが、増加分の多くは大阪・済州島間定期航路開設の影響を受けたものと考えられるだろう。

1920年代後半に至っても、日本での済州島出身者の評判はよかったようである。1928年2月には「一般鮮人労働者^(ママ)に各地でいろいろな批難のある今日済州島民のみは非常に歓迎され成功者も沢山出しているので慶南道でも全南当局と協議の上同島人だけは特に渡航阻止をやらぬことにしてゐる」という報道がある²⁷⁾。この時期、釜山から日本に渡航しようとする朝鮮人に対しては、厳しい渡航制限措置がとられていたが、済州島民に対してだけは「渡航阻止をやらぬことにしてゐる」というのである。しかし大阪の済州島出身者は、統治権力や資本家の支配に対し、決して従順に従っていたばかりではない。1920年代半ばから1930年代前半にかけて活発に展開された大阪在住朝鮮人の労働運動・社会運動において、済州島出身者が中心的な役割を担ったことは、よく知られた事実である²⁸⁾。

Ⅲ 過酷な労働と生活

在日朝鮮人紡績女工の労働・生活の状況については、先に掲げた金賛汀と方鮮姫の著作(『風の慟哭』『朝鮮人女工のうた』)がすでに詳細に叙述している。とくに今日では収集困難な体験者の証言が数多く収録されており、このテーマに関して、これらの著作以上の資料を発掘することは不可能と見られる。そこでここでは主として両名の著作から、済州島出身の元女工たちの証言を抽出、紹介しながら、彼女たちの労働と生活の実態を考えることにしたい。

(1) 渡航の事情

女性たちが大阪に渡航し、紡績女工となった理由は、何よりも故郷・済州島での貧困生活にあった。

「私は一二歳のとき [1927年—引用者] の四月に、故郷では生活できず、日本で働くということで日本にやってきたのですが、叔父さんの知り合いの人が岸和田紡績の見廻りをやっていたので、そこに口をきいてくれました。」(康玉児)²⁹⁾

「私の故郷の村ではくらしがたいへん貧しくて、日々の食事すら口に入らぬ日が多かったのですが、そんなくらしから抜け出そうと、必死のおもいで日本に渡ってきたものです。当時、昭和の三年 [1928年—引用者] でしたが、日本には叔父さんが連れて行ってくれましたが、行き先は姉が働いていた大阪泉南の岸和田紡績だと決めていましたので、叔父に岸和田まで連れていってもらいました。」(梁漢淑)³⁰⁾

このように女性たちは生活難から大阪に渡ってきた。2人の渡航時期はいずれも1920年代後半だが、注目されるのは、両者ともに叔父を頼って大阪に来たこと、そして就職先が岸和田紡績だったことである。この時期の済州島出身女性は、企業の募集に応じるのではなく、大阪・済州間に形成された縁故者のネットワークを通じて大阪で職を求め、すでに岸和田紡績はその代表的な職場としてとなっていたのであった。

康玉児はわずか12歳で大阪に働きに来たのだが、10代前半での渡航が珍しくなかったことは当時の報道からも垣間見ることができる。1928年9月の新聞記事によれば、織物工場で働く朴泰仁（17歳）と朴仁善（16歳）の従姉妹が大阪に来たのは13～14歳のことであった。彼女たちの毎月の収入は、賃金から食事代が差し引かれるため20円ほどであり、そのうち3円だけを手許に残し、残りは故郷に送金しているという³¹⁾。10代の少女たちの労働が、済州島の貴重な現金収入源になっていることをうかがわせる事例である。

(2) 労働条件

労働時間については、岸和田紡績の女工だった康玉児と、和歌山県の湯浅紡績で働いていた梁漢淑が同じような証言をしている。すなわち昼夜2部制の12時間労働で、午前6時と午後6時が交替時間となる。休憩は昼食時（午後0時）または夜食時（午前0時）の30分だけであった³²⁾。これは日本人女工も同様の、当時の紡績女工の一般的な勤務体制であったが、「食事をして部屋に帰ると、それこそぶっ倒れるようにして、万年床の蒲団の上に横たわって眠る」（康玉児）³³⁾ほどの過酷な労働であった。

そして工場内では、女工たちに対してしばしば暴力が振るわれた。梁漢淑の証言では、殴るのは現場監督や「見廻り」で、その中には朝鮮人もいたという³⁴⁾。

ところで賃金については、元女工たちの記憶は曖昧で、証言もバラバラであるという。前掲の表4によれば、1923年末の大阪市での紡績工（男女）の日当は、最高が2.00円、最低が0.90円、「普通」が1.20円となっていた。また1930年10月時点での大阪市の繊維工業労働者の日当をまとめた表5では、女子労働者の平均賃金は82銭であった。両者を単純に比較することはできないが、1920年代を通じて朝鮮人紡績女工の賃金が上昇しているとは考えにくい。

これらに補足して、1925年2月に実施された堺朝鮮労働同志会の調査結果を紹介しておこう³⁵⁾。調査対象は岸和田市、泉南郡春木町、堺市の各紡績工場である。この調査によれば朝鮮人女工の日当は初任給が50銭内外、1年後に70銭内外というから、上述の表4・表5の賃金水準にも満たないことになる。そしてそこから毎日10～15銭の寄宿料、月20銭の相愛会費（後述）、月30銭の通信料（代筆料）が差し引かれていた。しかも好況時には、紹介者である「取締り」に対して会社が支払っていた周旋料が、不況で支払われなくなったため、「取締り」は就職希望者から5～15円の周旋料を取るようになったという。

こうして見ると、大阪の紡績資本は第1次大戦時の好況により朝鮮人女工の雇用をはじめたのだが、その後は1920年代の不況により賃金が低迷するなど、労働条件はむしろ悪化していったのではないかと推測されるのである。

(3) 寄宿舍生活

当時の紡績女工は寄宿舍生活が一般的であり、朝鮮人女工たちも独身者を中心に、多くは会社側が運営する寄宿舍で寝食をとともにしていた。前掲の表1で「事業所同居者」に分類されているのが寄宿舍で生活している女工たちであり、これからも寄宿舍の居住者が圧倒的に多かったことが分かる。

しかしこの寄宿舍での生活に対しては、とくに女工たちの不満が強かったと言われている。まずその不衛生な環境が問題であった。

図4 岸和田紡績の寄宿舍



出典：岸和田紡績株式会社『岸和田紡績株式会社五十年史』（岸和田紡績株式会社、1942年）
備考：野村工場の寄宿舍と思われる。

「会社でくれる蒲団は一枚くれると、それを取りかえてくれるということは絶対になかったですね。……近くで見ればあかで布地が黒く光っているようなものでした。／私が寮に入って最初の日に会社から出してくれた蒲団は、前に働いていた女工さんが使っていた蒲団で、渡されたとき、ものすごい臭いがして、吐き気をおぼえました。その日、その蒲団の上で寝ようと思っても臭いがひどくて寝れませんでした。」（康玉児）³⁶⁾

「会社の寮監に、南京虫をなんとかしてほしいというと、その寮監が、「南京虫が出てくるのは俺の責任ではない。なんとかしろといわれても困る」というので、そんなこといわないで会社で薬を買って撒いてくれるように頼んでほしいというと、「予算がないのにそんなことは頼めない。南京虫にでも、今日から私を噛まないようにと頼むんだな」と嘲笑って……。」（梁漢淑）³⁷⁾

このような不潔な環境では、しばしば伝染病が発生した。1926年7月、岸和田紡績本社の寄宿舍で朝鮮人女工2名を含む3名が疑似赤痢（アメーバ赤痢）と診断され、同社では以前にも春木工場で猖獗をきわめたことがあったと報道されている³⁸⁾。後述する1923年と1930年の岸和田紡績争議を指導した山本辰夫の証言によれば「伝染病にかかった女工はもうどうでもよい、一カ所に隔離し、そこで極端に言えば死んでしまってもかまわない、というような扱い」だったという³⁹⁾。

また寄宿舎の粗末な食事にも不満が集中した。

「私は済州島の出身ですから、島にいたときはいつも新鮮な魚を食べていました。生活は貧しくとも、魚は海でいくらかでも採れましたから……。それが腐ったような魚で、その魚も鰯や鯖でしょう。島では当時、鰯や鯖は食べないで、畠の肥料に使うような魚だったのです。その魚も半腐りで、しかも尻尾や頭なんか食べられるわけがありません。」
(康玉児)⁴⁰⁾

「おかずに千切りの煮たものが出るのですが、千切りを長いことおいておくと虫がわくんです。賄いでは虫がわいていてもそのまま煮こんで出すものですから、食べている途中に虫が何匹も出てきたりするんです。」(朴清子)⁴¹⁾

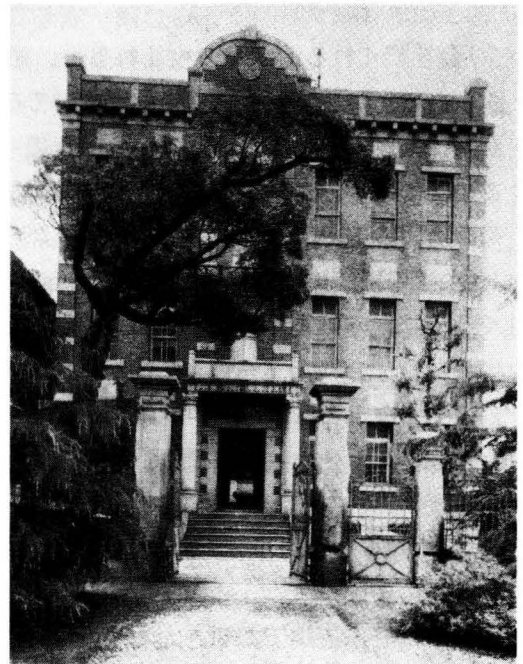
このような劣悪な内容の宿舎や食事の代金も、女工の賃金から天引きされていたのである。

(4) 相愛会と女工

ところで、「(2)労働条件」の項目で紹介した堺朝鮮労働同志会の調査によると、朝鮮人女工の賃金から月20銭の「相愛会費」が差し引かれていたという。

相愛会⁴²⁾とは、在日朝鮮人の対日協力者によって組織された「内鮮」融和団体である。1921年12月に設立され、本部は東京に置かれた(設立時の会長は李起東、副会長はのちに衆議院議員となる朴春琴)。相愛会は朝鮮人労働者への職業紹介、宿泊所提供などの事業を行う一方で、日本人企業家や警察と結んで労働争議への暴力的介入を行い、悪名をはせていた。相愛会は日本の各地に下部組織として地方本部、支部、出張所などを設置しており、大阪府では1923年に大阪本部、三島本部、和泉本部が設立されている。とくに和泉本部(岸和田市北町所在。金賛汀は「岸和田支部」と記載)の事務所は、岸和田紡績本社の前にあり、建物は岸和田紡績が提供したものであ

図5 岸和田紡績本社正面



出典：岸和田紡績株式会社『岸和田紡績株式会社五十年史』(岸和田紡績株式会社、1942年)

ったという⁴³⁾。このように泉州地方の相愛会は、岸和田紡績などの紡績資本と密接な関係をもって活動していたのであった。

紡績女工の賃金から相愛会費を天引きしていた例は、和歌山県の相愛会でも確認できる。やや時期は下がるが、1935年9月、和歌山相愛会長は不正な手段で済州島女性を誘致、搾取していたとして、大阪港水上署に留置され、取り調べを受けた。報道によると、この相愛会長は10年前から内海紡績広工場（有田郡）、昭和紡績工場（和歌山市）の朝鮮女工募集係となっていたが、35年6月に郷里の済州島へ行き、田口禎憲島司（兼済州島警察署長）から便宜を与えられ、募集した約100名の渡航許可を済州島警察署より受けたという。その後、第2次募集として、翰林面帰德里から女性10名を引率、大阪へ渡航してきていた。彼がこれまでに紹介した女工は3千余名に達し、彼女たちを相愛会に強制的に入会させ、入会金1円、毎月会費50銭～1円を徴収するなどして、私腹を肥やしていたという⁴⁴⁾。

相愛会は、しばしば在日朝鮮人労働者による批判の対象となった。1924年4月には済州島出身者が主催して相愛会会員糾弾演説会を開催しようとしたが、所轄警察署に届け出なかったとして解散させられ、2名が検束された⁴⁵⁾。また1928年8月ごろに起こった大阪・内海紡績の争議では、朝鮮人女工63名が15日間のストライキを実施したが、その時の要求項目の一つが相愛会放逐であったという⁴⁶⁾。ただし一般に朝鮮人女工にとって、相愛会は恐怖の対象であり、「オンニ〔お姉さん―引用者〕たちから怖い人たちだと聞かされていました。美しい女工さんたちがいると相愛会の全某が連れて行って妾にしてみましたというような話は聞きました」（康玉児）という元岸和田紡績女工の証言も残っている⁴⁷⁾。

IV 争議

(1) 岸和田紡績争議

泉州地方最大の紡績資本であった岸和田紡績は、繰り返し述べてきたように、済州島出身女性だけでなく、在日朝鮮人女性の代表的な就業先の一つであった。すでに表1で示したように、1924年3月末の時点で同社に働いていた朝鮮人は、本社工場で210名（うち女性199名）、堺分工場で98名（女性96名）、野村分工場で220名（女性212名）、春木分工場で250名（女性219名）、合計778名となっており、女性はそのうちの98.6%（726名）という圧倒的な割合であった。

朝鮮人による最初の争議は22年7月に春木分工場で発生した。上半期賞与が日本人に比べて低額であったことに抗議して朝鮮人職工271名（男52名、女219名）全員がストライキを起こしている⁴⁸⁾。1928年8月の争議は、事件を伝える新聞記事からはどの工場が起こったのか明確ではないが、本社工場での出来事のようなのである。朝鮮人女工300名のうち

約100名が「おかずのもりを内地人職工と同じにしてくれ、畳を新しくしてくれなどと待遇改善を要求して」8月6日の朝から罷業したが、相愛会幹部や岸和田警察署長らの調停で、同日の午後6時に復業した⁴⁹⁾。また29年8月の本社工場ストライキには、朝鮮人女工約200名が参加している⁵⁰⁾。

最も有名な争議は1930年に堺分工場で発生した大規模なストライキである⁵¹⁾。同分工場では30年1月以降、相次ぐ賃下げと操業短縮で労働者の実収賃金は4割も低下した。これに反発した朝鮮人・日本人労働者198名は5月3日にストを決議、朝鮮人女工を中心に約100名が工場を脱出し、翌4日よりストに突入した。大阪朝鮮労働組合はこの争議を積極的に支援し、15日夜には同組合の労働者約100名が堺分工場を襲撃したが、これは警察による激しい弾圧を招く結果となった。争議団は苦境を打開しようと岸和田紡績全工場でのゼネストを計画し、27日には朝鮮人自由労働者など約30名が春木分工場を襲撃する事件が起こった。しかし結局6月13日に争議団が会社側の主張を受け入れ、42日間のストは終結した。最後まで争議団本部に立て籠もっていたのは女工約30名（うち朝鮮人20名）であったという。

ところで興味深いのは、5月4日付けで提出された労働者たちの「要求書」の内容である。そこには、賃金値下げの撤回や、通勤手当・住宅手当の制定など一般的な経済要求や、帰国退職手当の制定など朝鮮人労働者の意向を反映した要求項目が掲げられていた。そしてこのほかにも、当時の女工たちの劣悪な生活環境を彷彿とさせるような要求項目が列挙されている。例えば、次のような項目である。「昼食、夕食時に運転を止めて三十分休憩させられたし」「売店の販売時間を延長せられたし」「寝具は夏冬の二通りとされたし」「電気のコード長くせられたし」「冬期は火鉢を設けられたし」「寝具は毎月一回洗濯せられたし」「外出、書信、面会を絶対自由とされたし」⁵²⁾。

1930年の岸和田紡績争議は労働者側の敗北に終わったものの、戦前では数少ない朝鮮人・日本人労働者の共同闘争の経験として、また在日朝鮮人女工争議の代表例として、その異議が高く評価されているのである。

(2) その他の争議

1920年代から1930年代前半にかけての時期は、在日朝鮮人労働運動の高揚期であり、大阪でも数多くの労働争議が発生した。その中から済州島出身の女子労働者が参加したと思われる、特徴的な事例を2件だけ紹介しておきたい。

大阪市内における在日朝鮮人の最大の居住地域は、現在の生野区に所在する猪飼野地域であり、済州島出身者もこの地域に集住していた。この地域には、化学・金属・機械・繊維工業などの中小企業が集中しており、済州島出身者も多くはこうした零細工場の下層の労働者として就業していた。

この猪飼野地域でも朝鮮人女子労働者の参加する大小争議が、しばしば発生していた。

たとえば1931年7月の松本ゴム工業所の争議では、経営陣と争議団の朝鮮人女工の間に乱闘騒ぎが起こったため、新聞で報道される事態となった。事件の経緯は、争議中の朝鮮人女工約30名が経営者（朝鮮人）と交渉していたところ、経営者の弟が女工に暴力を振るったため、激高した女工たちが反撃したというものであり、約15名の朝鮮人女工が検束されることとなった⁵³⁾。新聞記事からは済州島出身の参加者がいたかどうかは明確ではないが、争議の起こった地域から見て、その可能性は高いと思われる。

また1932年4月22日、大阪市西淀川区の小津武林起業株式会社撚糸工場では、同僚の不当解雇に抗議する朝鮮人女工36名が撚糸機械54台の糸を切ってストライキに突入したが、そのうちの一人が済州島出身の安平花という人物であった⁵⁴⁾。この会社は表1で掲げた「小津起業会社」と同一と思われ、大阪府下でも早くから多数の朝鮮人を雇用していた企業と言える。またこの争議は、日本共産党系労働組合の全国組織である日本労働組合全国協議会（全協）の指導のもとに展開された闘争としても、よく知られた事件である。争議はその後、5月14日に100名がデモを敢行し、同18日には朝鮮人労働者約100名が動員されて工場に押しかけ、6月29日には検束者5名に対する判決（懲役3カ月）に反発して朝鮮人労働者70余名が工場を襲撃するなど、長期にわたって熾烈な闘争が継続されたのである⁵⁵⁾。

おわりに

紡績工は済州島出身女性の日本における最も代表的な職業であり、その多くは大阪府の南部地方で就業していた。済州島女性が労働者として日本に渡航することになったのは、第1次大戦の好景気が直接の原因と言え、とくに大阪での済州島出身女工の急増は、済州島との間に定期航路が開設される一因になったと考えられる。定期船の運航開始により大阪に渡航する済州島女性はいっそう増えたが、一方で1920年代の不況により彼女たちの賃金は低迷する傾向にあったようである。

当時の日本において紡績女工の待遇は劣悪なものであり、被支配民族であった朝鮮人女工、なかんずく済州島出身女工の労働・生活環境はいっそう過酷なものであったと見られる。低年齢層が多かった彼女たちは、長時間労働と差別的な低賃金、不衛生な環境で粗末な食事しか提供されない寄宿舎生活、そして女工たちに寄生する相愛会の間接搾取など、さまざまな困難を体験することとなった。

こうした中で、階級意識に目覚めた女工たちが、労働条件の改善を求めて争議を起こす場合もあった。1930年の岸和田紡績争議はその代表例であり、争議には敗北したものの、その歴史的意義は今日、高く評価されている。

済州島出身女性の血のにじむような労働は、大阪の、そして日本の産業構造を支える底辺を担っていた。このことは植民地期だけでなく、第2次大戦後の日本の高度経済成長期

においても言えることであり、彼女たちのたくましい営みは今日にまで引き継がれている。

日本、とくに大阪と済州島との関係は、近代日本の朝鮮に対する侵略、植民地支配の中で形成された。したがってそれは、不幸な歴史的事情の下で結ばれた因縁と言わざるを得ない。しかし、だからと言って、名もなく、また自らを語ることもなく、歴史に翻弄された数多くの在日済州島出身女性たちのライフヒストリーを忘れ去ってよいはずはない。

歴史の渦に巻き込まれ、不幸な境遇にありながらも、済州島と日本との関係を築いていた女性たちの労苦をしのびつつ、本稿を閉じることとしたい。

注)

- 1) 金賛汀・方鮮姫『風の慟哭—在日朝鮮人女工の生活と歴史—』田畑書店、1977年。金賛汀『朝鮮人女工のうた—1930年・岸和田紡績争議—』岩波書店、1982年。
- 2) 金賛汀・方鮮姫、前掲書(1977)には、梁漢淑(北済州郡出身)、金玉南(南済州郡出身)の、金賛汀、前掲書(1982)には、康玉児(北済州郡出身)、朴清子(南済州郡出身)、高順鳳(南済州郡出身)の証言が収録されている。
- 3) 杉原達『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究—』新幹社、1998年。
- 4) 田村紀之「内務省警保局調査による朝鮮人人口(I)—総人口・男女別人口—」『経済と経済学』第46号、1981年2月。
- 5) 岸和田紡績は1892年に創立され、1923年現在の資本金は975万円、職工総数は6,210名に上っていた。後述する大争議の起こった30年には本社工場のほか、堺、野村、春木、津の4分工場が操業していたが、戦時下の企業統合の方針によって、41年に大日本紡績に統合された。
- 6) この時期の泉南郡の区域はかなり広く、現在の泉南郡(熊取町、田尻町、岬町)のほか、貝塚市、泉佐野市、泉南市、阪南市に岸和田市の一部も含んでいる。
- 7) 『大阪毎日新聞』1922年6月1日。
- 8) 『済民日報』四・三取材班(文京洙・金重明訳)『済州島四・三事件』第1巻(朝鮮解放から四・三前夜まで)新幹社、1994年、39頁。
- 9) 『済州島勢要覧 昭和十年』全羅南道済州島、1935年、20~22頁。
- 10) 田村紀之、前掲論文。
- 11) 梶田一二「済州島人の内地出稼ぎ」『梶田一二地理学論文集』弘詢社、1976年、94~96頁。原資料と見られる、前掲『済州島勢要覧 昭和十年』22~23頁より、一部、補足・修正した。なお原資料によれば、この調査での済州島出身の「朝鮮人内地在住者」数(1934年4月末現在)は50,261名(男29,562、女20,699)であった。
- 12) 『昭和十四年 済州島勢要覧』済州島庁、1939年、14頁。
- 13) 『大阪朝日新聞』1913年12月16日。
- 14) 「女工は概して温順且つ品行方正にして使役上甚だ利便多く……言語も約三箇月位を経過せば一通りの用語を意得し一箇年位にして総てに差支へ無き迄に巧妙となり労働効率上より見るも内地人女工と何等異りたる点を認めず」(『京城日報』1917年2月18日)。
「朝鮮女工は内地の女工に比して敏活を欠く事気の利かぬ事等の欠点はあるが馬鹿丁寧な事正直な事等の特長もあるから今後の指導如何に依つては内地女工と何等選ばぬ能率を見るに至るだろう」(「朝鮮人労働者 内地移入とその将来(2)」『大阪毎日新聞』1917年8月15日)。

- 15) 『大阪毎日新聞』1916年12月10日。「朝鮮人労働者 内地移入とその将来(1)(2)」『大阪毎日新聞』1917年8月14、15日。
- 16) 『京城日報』1916年5月16日。
- 17) 『大阪朝日新聞』1914年7月5日。
- 18) 朝鮮総督府「阪神・京浜地方の朝鮮人労働者」朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第1巻、三一書房、1975年、412頁。
- 19) 『大阪毎日新聞』1921年3月15日。
- 20) 梶田一二、前掲論文、108～109頁。
- 21) 『大阪朝日新聞鮮満附録』1922年7月28日。
- 22) 梶田一二、前掲論文、109～111頁。
- 23) 『大阪毎日新聞』1922年11月14日夕刊。
- 24) 金賛汀、前掲書、124頁。慶尚北道出身の元女工・成俊永の証言。
- 25) 『大阪毎日新聞』1921年3月15日。
- 26) 『大阪朝日新聞』1925年2月14日。
- 27) 『大阪朝日新聞附録朝鮮朝日』1928年2月10日。
- 28) この点については、김창후(金昌厚)「國外 濟州人^{たち}의抗日運動」『濟州抗日獨立運動史』濟州道、1996年、参照。
- 29) 金賛汀、前掲書、31頁。
- 30) 金賛汀・方鮮姫、前掲書、64頁。
- 31) 『大阪朝日新聞附録朝鮮朝日 西北版』1928年9月2日。
- 32) 金賛汀、前掲書、72～74頁。金賛汀・方鮮姫、前掲書、106頁。
- 33) 金賛汀、前掲書、73頁。
- 34) 金賛汀・方鮮姫、前掲書、142頁。
- 35) 『大阪朝日新聞』1925年2月14日。
- 36) 金賛汀、前掲書、61～62頁。
- 37) 金賛汀・方鮮姫、前掲書、92頁。
- 38) 『大阪時事新報』1926年7月9日。
- 39) 金賛汀・方鮮姫、前掲書、92頁。
- 40) 金賛汀、前掲書、66頁。
- 41) 同前、68頁。
- 42) 相愛会については、M・リングホーファー「相愛会—朝鮮人同化団体の歩み—」『在日朝鮮人史研究』第9号、1981年12月、松田利彦「朴春琴論—その選挙運動と議会活動を中心として—」『在日朝鮮人史研究』第18号、1988年10月、を参照。以下の記述も両論文による。
- 43) 金賛汀、前掲書、99～100頁。
- 44) 『大阪毎日新聞』1935年9月28日。
- 45) 『大阪毎日新聞』1924年4月10日。
- 46) 『自由連合新聞』1928年9月1日。
- 47) 金賛汀、前掲書、98頁。
- 48) 1922年7月29日、池松時和大阪府知事より水野錬太郎内務大臣ほかあて特秘第13285号「鮮人紡績工同盟罷業二関スル件(第一報)」(松下松次編『資料 岸和田紡績の争議(1919～

- 1937)』ユニウス、1980年、99頁)。
- 49) 『大阪朝日新聞附録朝鮮朝日 西北版』1928年8月8日。また『大阪時事新報』1928年8月8日、も参照。
- 50) 「岸和田紡績会社争議」『社会政策時報』1929年10月号(松下松次編、前掲書、78頁)。
- 51) 以下、1930年争議の経過は、金賛汀、前掲書、152～159、164～212頁、松下松次「近代紡績業と朝鮮人—岸和田紡績会社を中心として—」大阪歴史学会近代史部会『近代史研究』第19号、1977年10月、などの叙述を整理したものである。
- 52) 「岸和田紡績株式会社堺分工場労働争議」『1930年労働運動年報』(松下松次、前掲書、92～93頁)。
- 53) 『大阪毎日新聞』1931年7月15日。
- 54) 『大阪朝日新聞』1932年4月23日。『大阪毎日新聞』1932年4月23日。
- 55) 小津武林起業会社争議の経過は、朴慶植『在日朝鮮人運動史—8・15解放前—』三一書房、1979年、257～258頁、김창후、前掲論文、339～340頁、による。